

東日本大震災で福祉労働者が果たした役割に関する調査

報告集会

日時：4月20日（金）午後6時30分～午後9時

場所：全労連会館ホール



2011年3月11日、その日から被災地の福祉労働者は何を思い、震災と仕事に向き合ってきたのか・・・



主催：調査実行委員会（立命館大学石倉研究室、全国福祉保育労働組合）

後援：

連絡先：全国福祉保育労働組合 Tel 03-5687-2901 E-mail mail@fukuho.org

「東日本大震災で福祉労働者が果たした役割に関する調査」報告集会のご案内

昨年3月11日に東日本大震災が発生してから1年以上が経ちました。被災地では住民たちが生活再建と復興にむけて精一杯の努力を続けていますが、国の施策の遅れや新自由主義型の復興政策のなかで、住民本位の復興が進められるかどうか大きな課題となっています。

今回の震災の復興が遅れているもうひとつの理由として、以前から進められた政府の「構造改革」による自治体の予算や人員の削減、福祉や医療制度など社会保障の切捨て、地方の農水産業や経済の衰退、その結果として地域のコミュニティの崩壊などの要因が強く作用していると言われています。福祉の分野でも、これまで相次いで制度が改悪され多くの福祉現場では経営難や人手不足が慢性化してきました。そこに起きた震災のために被害が拡大し、その後も施設の修繕や人材の確保が思うように進まない状況を生んでいます。地震が午後の時間帯であったことが不幸中の幸いで、「これが夜間や外出活動などの時間に起きていたらもっと悲惨な結果になった」という声もあるほどです。

それでも、福祉現場に働く労働者は、震災直後から子どもや高齢者、障害者の命を守り、少しでも早く日常生活に戻すために奮闘してきました。しかしそのガンバリには限界があります。自身の震災によるショックや積もる疲労、先々が見通せないもとの、健康破壊や離職する労働者も生まれています。

私たちは、こうした福祉労働者の姿に、公務労働者としての強い使命感を感じると同時に一方で労働者がこれまで置かれてきた過酷な労働環境や福祉施策の貧困さを見ずにはいられません。震災はまだ終わっていませんが、この経験から何を教訓として汲み上げ、これからの福祉労働運動に生かしていくのかは、私たち国民全体の課題でもあります。

このような問題意識から、私たちは「東日本大震災で福祉労働者が果たした役割に関する調査」を実施しました。これは被災した施設で働く福祉労働者に直接に話を聞き、またアンケートを実施し労働者のリアルな声をまとめたものです。報告集会では、この調査結果と被災地の福祉の現状を報告し、参加者と問題意識や今後の運動の方向性を共有したいと思っています。福祉の仕事や運動に関わる多くの方にぜひ参加して頂き、ともに福祉とは何か、福祉労働とは何か、という議論をしたいと思っています。

この調査結果が、被災地の一日でも早い復興のために、震災弱者と呼ばれる子ども、高齢者、障害者の生活保障と福祉労働者の待遇改善に、また今後の震災で被害を最小限に留める施策づくりに少しでも役立つことを願っています。

「東日本大震災で福祉労働者が果たした役割に関する調査」実行委員会
(全国福祉保育労働組合、立命館大学石倉研究室)